

支那一夕話

(以印刷代謄寫)

目次

支那の物語	-----	1			
支那人の勤勉	一		支那の文明云ふもの	十	
支那人の忍耐	三		支那の文化とは?	十五	
支那人の忠實	四		四庫全書、通鑑、大果して非?、本草學、石佛		
支那人の自治心	七		寺の話、藏書、哲學、文化禮識		
支那雑談	-----	三			
支那料理の話	三		揚子江の魚と漁	七	
支那町の特徴	四		動物を禦するに巧な支那人	十五	
田舎旅行の話	五		支那は私立學校	十八	
苦力の話	五		支那之看板	十八	
支那の風呂屋	六		支那人は天下人	十八	
筏の話	六		環境に身を處する支那人	十八	
日本人の解し難い支那語	六				
新名辭	七		羊頭狗肉	十九	
阿片税に就いての話	七		以夷制夷	二十	
阿片と軍閥の話	七		遺父近攻	二十三	
支那で保護云ふこと	七		廢督裁兵	二十七	
見かけと中味	八		西北と東南	二十九	
黨同伐異	八		同文風種	三十三	
處士横議	九		日支あべこべこと	三十四	
走馬燈	二		東西の教育	三十八	
吳越同舟	二		請負制度	四十一	

附録

第一 國民革命の回顧	-----	一
------------	-------	---

國民革命の過去——國民黨の改造——國民革命軍生々——國民革命軍の北伐——國民革命軍の武漢進出——
國民革命軍の分裂——分裂又分裂——中央政府南京に移る——武漢に於ける革命軍の治蹟——共國兩黨の

分發——漢寧の決裂——漢寧戰の概況——南方局頭に擡頭した廣西派——湘鄂の戰起る——湘鄂戰後の局面——北伐軍動く

第二 國民革命の將來觀 七〇

第三 國民革命の將來觀に就き再び 七〇

第四 國民革命の將來觀に就き三たび 七〇

第五 日外交官との話 七〇

(終)

支那の話

(岡野少佐講演)

支那人の勤勉

支那人は勤勉である、之に就ては誰しも異論はあるまい、但し萬事複雑な支那であるから多數の中には除外例もあり、又矛盾性をもつた支那人であつてみれば勤勉な反面に怠惰と云ふ美德も十二分に持合はせてゐることは申迄もない、勤勉と云ふのは絶對多數の良民に就てのことで、除外例と云ふのは最少數の有識階級と少數の遊民階級のことを指すのも申迄もない、尤も考へ様によるた絶對多數の良民階級でも實を云へば自己の利益の爲めに勤勉なのかも知れない、だから働くはぎ儲かる仕事となれば手足から血が出て働くが、月

給で決めて使ふ中々怠惰とそれこそ抽断も餘もないのが一般である、只儲けることの爲には努力と信念を天秤にかけることを忘れて努力を吝まない、例へば一里の道を拉いて二十錢なら三里拉けば六十錢の勤業だが、そこに一里三十錢の仕事と三里五十錢の仕事があるならば多くは三里の方を採る、即ち儲が多ければ破格の努力を意せぬ、之だけは眞に勤勉と云ひ得る事實である、そふは云ふもの日雇ひ仕事にしても確に勤勉と思はせられるのは日本の大工と支那の大工を一寸比較して見るに合点のゆくことだが、日本の名人氣質と云ふか棟梁など云はれるものになる、飽の如きも決して自宅では働かない、朝九時頃仕事の家に行つて煙草一服した上でポツポツ飽の手入れを始める、十二時には晝飯、三時にはお茶を、四時をまわれば手仕舞の用意、これは能率の擧る道理



がない、而して日備質三國三が無遠慮なことを云ふ、
 之れを支那大工に見ると腕のさへ方こそ不器用だが、
 朝六時からお晝頃に三十分休むだけで晩の六時まで相
 當懸命に仕事をする云つた堪極式である、
 更に長春や大連で特産品の出廻り時に塊を積まれた大
 豆袋や豆糟を、人間力とは思はれぬ程擔いて運ぶ苦力
 や、東洋一苦熱の漢口の碼頭に、全身に油汗を流しつ
 、掛壁勇ましく荷役する碼頭苦力や、廬山や泰山に登
 る時の勇敢な轎夫や、各處の炭礦あたりに働く礦夫な
 るものを見たならば、世界中の誰とも勤勉其のもの、
 如き支那人を見出すにはおかぬであらふ、又これは
 恐るべき國民だ云ふ感が起らずにはゐられぬであら
 ふ、
 併し其れは産業が未發達の爲め金儲がない爲めの已む
 ない勤勉だ云ふ人があつたら他國人を見るがよい、

忍耐強い韌強性を見出すであらふ、性急な日本人から
 見るに實に馬鹿げた支那人を見へるかも知れないが、
 併し其馬鹿氣たことが到底日本人の企て及ばないことを
 成就してゐる、支那人の様な悠長なことは文明人に
 は出来ない云へばそれまでであるが、そんな悠長な
 人種を住まはせ得る支那は一面から見て偉大な未來を
 抱いた國柄である云はねばならない、試に見よアメ
 リカ文明は咲き亂れた花のやうに華やかに自動車にの
 りまはして今やアメリカ全土の重油を費しつくさんこ
 しつゝある、然るに支那はまだ油田には手もつけてな
 い、石炭も同様だ、現在云ふことにも即してもの
 を見るに文明と非文明の差はあるが、將來云ふことに
 着眼して觀察すると或意味に於て支那は前途洋々渺
 々なりである、國そのものの歩みが爾かく悠長である
 から忍耐云ふことも生れ、之に住む民族も亦極長で

手近かなら朝鮮人である、もつと手近なら日本人を見
 てもよい、食むない云ふ男に支那苦力だけの勤勉さ
 や勞働が見られるであらふか、茲に於てか僕は支那人
 は勤勉なりこの謙辭を呈するに最早一寸の躊躇もしな
 いであらふ。

支那人の忍耐

勤勉云ふこと、忍耐云ふことは、仕事をする上に
 於ては切離されない文字であること申迄もない、支那
 人の忍耐力は大陸的平原人種である處から、凡てが應
 揚て悠長で緩慢である其代償として特牲づけられる
 ものであることも云へるが、其原因は何んにしても忍耐
 強いこの事實は認めまいとしても能はぬ、前節に於
 て話した勤勉なる苦力の勞働振りに於て直ちにそこに

忍耐強い云へるのではあるまいか、由來性急な忍耐
 力は耐立しないが忍耐であるものは同時に悠長である
 吾々の如く長江を上下するものには日常其悠長な忍
 耐が眼前に展開されてゐる譯である、第一に長江の流
 れそのもの、第二に悠々濁流のままに數百哩を下り
 行く筏、第三に江水に逆らい橋頭より綱を江岸にこり
 之を拉きつゝ數百里の江岸路を溯り行く舟夫、第四に
 流と風の大自然に善處しつゝ悠々帆船を操る船人、第
 五に一群數百羽の家鴨を二葉の扁舟と輦一本にて江上
 を驅りつゝ數百里を下り行く家鴨守り、第六に夏期水
 至れば姿を没し水降れば再び現はれ悠々江水の昇降に
 まかせて出沒する江岸の楊柳、第七に江岸に草飼はる
 る水牛の群童兒は水牛の脊に乗り騎は水牛の角端にこ
 まる、凡そ斯の如き悠々の光景は皆之れ民人の忍耐性
 を語る好個の象徴ではあるまいか、若し夫れ家畜爲鳥

の飼養訓練に至つては、世界中獨特の妙技であつて一に悠長な忍耐によつてなされるものでないものはない、一疋の猿を生擒にせんが爲に半歳を費し、一疋の虎を獲んが爲に二ケ年を要したる位の話は決して珍らしからざる事實である、僕は忍耐を云はんとして余りに多くの悠長を語つたが、諸君は悠長の環境に住む此支那人に忍耐の強いことは最早疑はないであらうことを僕は信ずる。

支那人の忠實

支那民族性の暗い半面のみが余りに多く世間に知れ渡つてゐる爲に、今茲に題目に擧げた様な忠實なき云ふ性質は、何んもなく映りがわるくて地獄で佛の顔を見るやうな心持がせぬでもない、例へば世人がよく云ふ

た揚句きまり悪さうに遂に斷念したり、それでも辛うじて突刺した一剣を手早く口に入れんが爲に、突刺した右の手と口が同時に反対方向に運動して危機一髪の間には口を出してやつと落さず口中に取込むなせば、潔癖にしても少々度が高すぎる、尤も此連中は西洋崇拜患者に屬する人々なので、西洋人の「チーバーチー」なごで木柄のお梟子は潔らかな指でつまんで食べることを知らず、何んにもかでもナイフ、フォークを心得てゐる連中である、又日本便所にした所で、上流支那人の毎度掃除する置便器だの、下階階級の青天井に比べて、狭苦しい置便器で鼻の神経が卒倒しそふな處に跨つて用たしをするなご、決して自慢する程の潔癖でもないのではなからうか、先方では日本人と云ふものは不思議に清潔振りたがる民族だなご評するかもしれない。

様に人を見れば泥坊と思へは支那に於ては正しく事實だご云ふ、それは僕達も正にさやふに思はせられるのであるが、人が一度落したものは世界に持主のないもので一番先に見付けたものが持主だご決まつてゐる社會であつてみれば、拾ひものは必ず警察に届けろご法律づけられた社會に住む人から見、恰も前者は泥坊でもあるやうに見ゆるかもしれないが、その是否論は比較的のもので絶對のものではない。

支那人の不潔ご云ふごご、日本人の潔癖なきも見方によつては必ずしも逐一潔癖にのみ贊し難い点がないでもない、砂糖其ものの製法やお菓子製造元の不潔を棚に上げて、拵へる牡丹餅を馬鹿に潔癖がつたり、菓子器から木皿にさられた茶菓子を苦心しつ、襖揚子や小さな「フォーク」なごで食べんごするなごは如何なるのか、旨く成功すればまだしもさんごつツ衝きまわし

挿話にしては少し長談論であつたが、斯ふ云つた様な譯で忠實專實ご心得てゐる民族の内に案外不忠實ものが多かつたり、掛引打算實利の塊りのやぶに云はれてゐる支那民族の血の中に忠實ご云ふ一脈の通つてゐるごごは必ずしも不思議ではない、況や勤勉ご忍耐ご云ふ特性を持った支那民族ご云ふ御から見れば忠實は最も然るべきごごであるやふにも思はれる、併し支那人に眞個の忠實を認むる場合はご云へば、少數の例外は別ごして、一身の生活の保証が或人によつて與へられた時其人に對して盡くす時の忠實であるご云ひたい、僕が北京にゐた當時役所に使つてゐた抱車夫は、二十歳の時に滄州を出て北京に来て、二十年間忠實に勉めて、月給が飯櫃自持で最初の十元から十二元に増額されたばかりであつたが、それでも一ケ年に三十元位の貯金を残し、三十二歳の時郷里に歸つて結婚し妻を伴

れて再び来て其當時齟齬してゐた、只寄る年波で車夫は重荷だ云ふので使歩き庭手入れを担当してゐた、今は四十五六になる筈、又揚子江の或る河船で火夫を二十年一日の如く、勤めた男があつた、船主は其忠勤に感激の余り、上級の月収の多い役割に本人に相談を持ち掛けたら、本人は頭を横に振り眞平御免なり此年になつて不馴な仕事に手を出すより一生これぞ澤山だ云つた云ふ話も聞いた、之等はほんの二、三の例に過ぎないが、こんな例は幾らでもあるのみならず姑且支那人には通有的である、生活の安定、之が生に對する第一の執着である處から、夫れを後生大事に捕へて放すまいとする爲に忠實が生れるのてらぶが、但し之を無理な忠實虚偽な忠實として一概にケナスのは酷である。

他國の例で云ふと、米糧何んだ、斯んな野郎に使はれ

るのは眞平だ、飼犬よりも淺ましい根性を出して後足で親方に砂を蹴る位の事は屹度やるころを、支那人は決してそふはしない、如何に文明人種と雖も眞底の忠實などは當世では多くは得難いと思つて然るべしと思ふ、今一つ支那人を雇ふ時は最初に給金を定めることが極めて執拗である爲め、支那人情を知らない外國人などはどうかするともカツ腹を立て、雇入交渉を斷絶するのであるが、雇はれる方の支那人から云ふと、一度定まれば十年が二十年でも總一丈も増額されない支那の習慣から來た打算で、月一圓の給金差を二十年に積ると二百四十圓、一生一代の結婚式が出来る云ふ胸算用であるから無理のないことである、日本人などが日本の習慣を其儘に他日増額してやることは決まつて居るなき云ふが、未來を堂にしない支那人にはそんなことは了解が、出来ないのである、其代り一度決

まつて雇入られると、便主が随分酷使する時があつても之に對して一言の苦言も云はない、此邊も性急で頭ばかり高い他國人には辛抱の出来ない支那人の長所である。

支那人之自治心

日本あたりは結構な御國柄であるから官憲は人民に對しあらゆる保護を興へて呉れるが、支那では之を全く反對に官憲は人民に對してあらゆる壓迫を加へる、つい先漢でも四三事件當時の漢口居留民の損害に對して御官から救済資金が下つた、廣が之をきいた租界内に住む中華民國の人々、それは眞個のこころか疑がつて次に眞個を知れた時返り身になつて日本の政府はありがたいなあ云ふ三嘆三稱した、其聲が深刻と云ふが長

き義仲と云ふが吾等の到底眞似られない表構であつた斯ふ云ふ風に永い間の虐政に馴育せられてゐるが爲に自治と云ふことが非常に發達してをり、又各々も永い間の傳統から自治心を多量に持ち合してゐる、英人でも米人でも、支那で排斥を受けることにも二にも自國の官憲に縋るが、そこに行くに外國に大きな店を張つてゐる支那人あたりはぎつしりしたもので、自分の頭の軀は自分で逐ひ、逐ひきらぬ時は之運命なりと諦らめもする、そこで相手は大抵此無抵抗的忍耐と諦らめに根氣まけがするのである、都會地にあつても市役所と云ふ様なものは國利民福には一向に關せないで只如何にして税金を捲揚げるかを心掛けるのである、だからそんな官憲は人民は頭から當にはしない、各都市にある總商會と云ふのが事實上の市政行政の自治機關である、そこで新しい軍隊などが戦に勝ち誇つて余所が

ら其都市には入り込んで来るゝなるこ、先づ總商會の代表が其軍の好むような旗を押し立て、歡迎に出掛け、先づ并つ待たれよ貴軍は幾ら位で此都市の掠奪を勸辨して呉れるか、もつよりこんなに刺き出しには云はないが、口を切る、そうするゝ軍長官の方では骨董の賈買の様に大きく吹きかけ、相互が掛引を試み最早之以上値切るゝ亂暴をされるゝ云ふぎりぎり結着て手を打つ、何のこはなしに前に歡迎と云つたのは實は惡魔避けのまじないに行つたこになるのである、斯の如く總商會は平素色々工未して金を積み立て置いて、治安維持の爲や商業發達上のこに使用するのである、固より總商會の仕事はこんな簡單なものばかりではないが、取りもなほさず支那中が一番整つた自治機關であるこに間違はない。

又個人間の争ひ事にしても、うつかり有慾に持込むゝ

相方共に惡智慧の働く官吏の爲に食ひものにさるゝ例が多い、だから所在に長老めいたものがゐるて相互の間に立入つて挨拶をする、此挨拶なるものが何事も体面を重んずる支那人にはなくてならぬもので、甲と乙とが争ふ場合お互に傷ついても損てあらし、まゝりて敗けるのも体面に關する、そこで大聲を張上げて相互に罵詈謗を交換し恰も仲裁人を呼ぶやふに口先まで張合ふ、處て仲裁がないこそこらにある石を拾つて振り上げる、併しなかく、投つけない、そのうちに仲裁がは入つてまゝりて靜める、そふするゝ余計に猛りたつてお互に取れない素振を見せる、が心中は此の助け船ではつゝ安心するのて喧嘩相手同志は茲て仲裁者の面子を時立て、猛りつゝ、両方に引下り、手に持つた石を何さなく自分の足許に力なく落し、二十間も間隔を置いてまた罵詈の交換をする、お互が別れて両方に

歩き出してから更に願て罵詈の投げ合ひなる之が余儀なこ云ふのである、喧嘩にしても一かぎの形式がある、斯ふして喧嘩が仲裁によつて納まるゝなるこ、仲裁の面子も立ち両方共敗れた事にはならずお互の面子も立つゝ云ふこになり、警察のまばきを受けないて一時の喧嘩で三面子が立つて圓満に納まるゝこなる、此の面子や仲裁なこは法律や規則のもの云はぬ支那では、自治慣習上重要な位置を占めてゐるものである。

隣人の急に吐かぬ習慣の支那では個人としても個人自治が非常に必要である、例へば舟が一隻急に難破したこしたら、溺れる舟人を助けるこよりも、そこに浮き上がった流れたりする品物を拾ふ方が第一に立つゝ、或時人間と豚と一緒に水に溺れたら、人は助けなかつたが先を争ふて豚を助けたこ云ふ話がある、其時何

故人を助けなかつたか云ふこには二つの理由がある、一つは豚の方がお金になる、今一つは其場合に人を助けるこお前が突き落したのたるふと云ふ云ひ掛りをつけられる處れがあるからである、萬事がこんな風になつてゐる社會故、自分のこは自分でまばく、決して人頼みはしない、てはあるが亦反面に於て自利の爲に他人を利用せんとするこにかけては圖々しいこも面憎いこも云へない程の度胸も持つてはゐる。

今一つ感心なこは、支那にはそれこそ幾十種類の酒があり火をつけて燃へるやうな強いものもあるが、往來あたりで酔ざればついぞ見たこがないと云ふこにて、之は面子なこ云ふこからも來るが酔ざれても世話して呉れる人がないこころから、自然自治制なこ云ふこが習慣性なつたものであるらしい、兎も角この一事は日本人から見ても好い手本である。

今日支那官制を云ふことを書いた書物を見るに、督辦とか省長とか道尹とか縣知事などがあるが、事實は此等の人々によつて民利民福が進められてゐる例は甚だ少ない、田舎では村の長老の不文的自治が例の仲裁式によつて行はれてゐるのであつて、官吏役人は只税金を捲き上げるもの其内にも普通の捲上げ方をするものは上等の方と相場が決つてゐる。

支那の文明と云ふもの

支那文明と云ふ様なこんな大きな標題を掲げては見たもの、勿論僕輩の手に余る問題である事は判り切つて居る、併し支那のい、生面を話すにはこんな事も話さねばならないやふな心地がする、そこで僕はこの問題に就いて見たり聞いたり考へたりした事を引括めて話して見る事にする、或學者は世界の三大古民族を評

して希臘人は智的であり美的である、印度人は冥想的であり宗教的である、支那人は意志的であり倫理的であると云つた、其れは確かにさうであるが僕等の様な素人目にも見へる、其の中つて居る、中つて居らないは別として、斯様に云はれる程特徴ある世界の三大古民族である事は事實である、さうして其三民族の中で今日民族的に榮へて國家的にも兎も角獨立國家として存在し、不平等條約や屈辱的壓迫に依つて体の良い桎梏を掛けられながらも、一方に於て金時の後家様然たる誇を世界に示しつゝある事は、他の二大古民族の支那民族に及ばない處である、そこで吾人はこうしたさうかに支那民族の偉大性の伏在を認めねばならない、此等に就いて深く研究すれば種々な方法も方向もあるであらう、乍然斯の如きは閑日月を持つた悠々たる學究の領分に屬するのであつて、通俗的を主とする僕の話

の領分外として逃げ度い、只一つ支那の文明なるものは諸他泰西の文明とは大いに趣を異にして居ると云ふ根本的一点に就いてのみ話す事とする、僕の根本的に云ふのは文明の構成上から云ふのであつて、深い事は知らないが、西洋の文明が座蒲團の積重ねで、時代々によつて一枚一枚がされるもの、様に見ゆるのに反し、支那文明はピラミッド型に裾の方へ擴げられたワン、ブロックであつて之を削がす事が出来ない、支那文明が濶庵なら泰西文明は千枚漬とも云へよう、さうしてピラミッドの頂点は何であるかと云へば、詩經、書經、易經であつて、此の千古不磨の大典が、烟さし歴として、滔々として流れたる五千年文明の源泉となり淵源となつて居る、如何に星移り物變つて文明の形式や世相が異なつてゐても、右の三經典の教義なり道理なりを其の時代々々の時代思潮に當嵌めて解釋

する時には皆よく解釋し得られるのである、語を擧げて言へば支那の如何なる文明の世相も之を詩書易三經の教理に歸し得られると云ふ事であり、又支那には三千年五千年の昔に於て已に斯の如き偉大なる文明の源泉たるべき經典を持つて居つたと云ふ事も判る譯である、而らば此の三經典が如何なるものであるかと云ふ事を序に一言申し述べて置くならば、今より二千二三百年前世界三聖の一人たる孔子が現れて、伏羲文王周公等の太古聖代の政治的文獻を制定して、政治經濟に於ては詩經、文學社會に於ては詩經、哲學に於ては易經を打立て、之を後世に遺された、之が即ち三經典であつて源は遠き太古にあつて之が完成は實に孔夫子其人にあるのである。

て其實は全く選舉ではないのである、殊に省長選舉に至りては武力を有せざる者で當選すべき方法がない。

四 民族 的 の 考 察

支那の支配者は多くの場合、外民族より出で居り、殊に北方外民族又は外民族の支那化せる者が全國を統御した歴史が多い、されど之と反對に外民族の侵入が著しく内亂を助長して居ることもある。近くには清は滿洲族を以て元は蒙古族を以て、遼金は滿洲族を以て支那に入り國を建てた、古にては秦始皇は支那化せる外民族を以て、周の文王武王も亦然りである、中間に於て漢、唐、宋の如きは所謂漢族であれども、隋は陝西甘肅の地方より、唐は山西蒙古の間より、宋は直隸より出で、支那化せる外民族の力を恃んで其業を成して居る、外民族と無關係で統一をなした者は、古くは漢、近くは明の二代に過ぎないのである。

東西の史家は言を一にして、支那民族は西北より黃河に沿ひ、支那に入り國を建て文明を作り、今の支那漢民族となつたと云ふ、然し上代西北より來りし民族は、土着人民を悉く驅逐し、自己民族のみで國を作つたが、又少數の武力的外民族が侵入して土着の民の支配者となり、土着文明を取つて自家の者としたかは考ふべき所である。

周が陝、甘の間に力を養ひ、支那化せる外民族の力を以て殷に代りし狀況は、まさに秦始皇が同じく陝甘の力を以て六國を併合したと同じである、周は夷狄と稱せられざれど、秦は夷狄として永く排斥せられて居る、後世に於ても純外族たる者と支那化せる外族との區別はある、思ふに周、隋、唐の如きは支那化せる外族の力を以てせる者にして、遼、金、元、清の如きは比較的中原化せざる外族である。

而して歴代最も恐るべく最も憂ふべき者は、此等塞外諸民族であり、一外民族が始め中原に近き地方に入り、尋で中原を服し王者となるや、直に其後方より連續南下せんとする他の外族を防がねばならぬ、詩經により周代に如何に中原の民族が北狄西戎を防ぐに苦しめるかを明にすべく、漢一世の間北方匈奴と連りに争ふを見、秦始皇の如きも力を擧げて長城を修築して北狄に當り、兩晉六朝の間に五胡が十六國を中原に立てしあり、唐五代晋宋しきりに北方の難あり、遂に蒙古、金、遼、清の中原壓倒を見るに至つたのである。

要するに支那中原の治安と北方外族との關係は極めて密接の者があり、王者は外族より出づるか、然らざれば外族の力を藉るを必要とするものである、外族も中原に入り暫く居住するや悉く其固有武力を失ひ、また新たなる外族の侵襲攻伐を蒙るのである。

是に於て歴史には外族侵入の爲め、五胡十六國又は五代の後唐後晋後漢の如き内亂助長の跡も多けれど、外族又は外族の力を藉る者が、比較的によく又容易に支那統一をなせし事を明にするを得るの

である、換言すれば支那内亂は外族の力により始めて鎮定せらるゝ事實が少なからぬのである。

然らば今の支那外民族の情形如何、蒙古族は昔日の勢なく、滿洲族、西藏族、天山族も亦勇武衰へ、是等外族が支那國勢を左右する時勢は去りし如く見ゆる、されど比較的北方に近き支那人は最も優勢である、張作霖の東三省に於ける、馮玉祥の直隸に於ける、曹錕、吳佩孚が直隸河南に根據して其勢力を維持したる、安徽派が北京より内外蒙古を運ねて其武力を養はんとしたる如き、皆歴史的に然るべき所以を有して居るのである。

支那王者の中最も南方に起りし者は漢、明二代である、然し漢も山東江蘇の間より起ち、明も河南安徽の間より出でし者で、地理的に見れば南と云ふよりも寧ろ北支である、揚子江一帯に出でし者は一時南方の雄たるも、未だ嘗て全國を制した事がない、戰國の楚の如き三國の吳の如き、南朝四代南宋一代の如きは南方勢力の代表であれど、また中原を取るの王者ではなかつた。

而して今其比較的支那統一に適すべき北支の勢力を通觀するに、外族は遽に昔時の勇を復興し難く又外族に近き北方各雄も全國を併合する力は猶ほ甚しく足らぬ所がある、若し北方に一大偉力の存在せば比較的速に内亂を終息し得べしと考へらるゝも、此事は近くに望がない、此の點より見て内亂は矢張近き將來に己むものとは思はれない。

但し將來の支那と最も密接なる關係を有すべき一大民族は、必ずしもなしと斷ずべからず、西比利

亞民族が是である、昔時成吉思汗の崛起せし處より更に北方に在る民族である、若し今の西比利亞に相當確實なる勢力が養成せられ、之を以て支那内争の機會に乗せしめんか、萬里長城は支那の恃むべき防禦線ではない、黑龍江流は支那の據るべき國境線ではない、秦時の明月漢時の關、支那の北患は眞に憂ふべきことゝならん。

今遽に西比利亞民族と支那との關係を考ふるは、杞憂に過ぐとの説もあらん、されど歴史は常に西北又は北方より新なる勢力の南下を防ぐ能はざるを明示して居る、一外族南下して中原に入りては、直に新に南下する者を防ぐを要して居る、近く明は幸に蒙古を塞外に追ひ得たりしも、直に清は瀾蒙を運ねて四百州に二百餘年の支配者となつた、今清族は其形を失ふた、然し新に来るべき勢力は漠北に徐ろに力を養うて居る、外蒙は今や支那の版圖でない、烏梁海蒙古も然りである、科布多蒙古も然りである。

昔時唐は回訖の兵を藉りて安祿山の亂を平げた、宋は金兵と結んで遼を迎へた、然し外族の兵を藉るは外族の中原跋扈を誘導した者である、其禍は直に防ぐべからざるに至つた、今奉天軍が露兵を以て南下せしを遽に然りと斷ずるは早計に過ぐるが、露の一旅團が江南の野に戎馬を運ね銃砲を具へて横行するは、有史以來の未曾有の現象である、「馬を吳山第一峰に立しん」と唱ひしは外族たる金の王者であつた、楊柳依依たる江南の水郷、北兒は馬を留めて金陵姑蘇の春を賞して居る。

(大正十四年三月雜誌支那)

支那の風呂屋

支那人は風呂には入らない國民であることは周知のこと、甚だしいのは生れてから死ぬまで三度云ふ位に云はれてゐる、さうも昔から一般に風呂桶などはなかつたもので、精々鹽浴び位のところであつたらしい、處が近頃になつて段々外國の風習が輸入され又外人を交はるやふになつて、西洋だの日本だの衛生思想がは入つて來るにつれ風呂屋を云ふのがボツ／＼出來だした、あの大きな看板に衛生盆池とか官盆とか盆盥とか書いてあるのがそれである、此支那風呂屋なり又風呂屋に行くに云ふ支那の人達の考へを云ふのが、亦如何にも支那國民性をよく物語つた一つで面白い、其特徴を擧げて見ると、一軒の風呂屋に上等風呂と並等風呂があつて、それは皆一人々々の西洋風呂になつて

對多數階級の爲めに拒はんだのであらふ、拒む方もさひさいが拒まれる方にも三分の非はある譯さも云へら、近頃平等平等と念佛の様に云ふが、支那自身さふした特等と下等の差別を立ててゐることに就ては、ついで苦言を聞いたこともなければ平等呼ばはりも聞かない。

並等風呂に就ては僕は實地の經驗を持たぬが上等風呂は屢經驗した、此風呂は官堂と云つて官の字がつけられてゐる、昔から官を尊んだ証據である、其設備は中等洋式ホテルの風呂桶のもので、普通は一軒の風呂屋に十乃至二十位の湯槽がある其湯槽は一つ一つに仕切られ休憩室には炕床と云つて日本の床の間の様な寝台の様な恰好をした大きな机が置かれ、其上には中央に長方形の紅木製茶ぶ台を置き、其兩側に一つ一つ机が置かれ二人のものが茶ぶ台を繞りして腰掛ひたり又寝

る、上等は器物が稍上等で稍清潔で休み場所も一通り設備が整つてゐる、並等は之に反して不潔で凡てが整つてゐない、斯の如く一人風呂になつて共同風呂がないところが個人主義の國民性を語つてゐるものであり、上等と並等のあることは他國の電車の一視平等なのに反し、支那電車には是非とも特等と並等の必要ある所以と同じで、まだ一様では律せられない國民なることを物語つてゐるものである。

つい近頃迄上海の外國人公園に『天と支那人入るべからず』の標札があつたのは有名な話だが、かの五三〇事件當時からの排外運動で、之を憤慨の種子にして民衆運動熱を煽り、遂にそれを取除かした、か併し實を云ばいかに外國人でも電車の特等に乗る程の支那人の爲めに入園を拒んだのではなからふが、只支那人同志でも一緒に車はいやだと云ふ程嫌はれもの、下層の絶

そべつたりするやふにしてゐる、茶ぶ台の上には煙草盆でも茶釜でも阿片道具でも茶菓子でも好み次第に樂しめる様になつてゐる。

勿論着物もそこで脱ぐ、先づ風呂には入るに三助がきて全身を洗つてくれることは日本の三助よりは遙かに入念で洗料は二十錢位である、其方法は客の身体を蒸して置いて頗る大まかな手際で股から肩まで一なでに特種の粗布でなで上げるのである、さうするに話は少し大きいが垢は肩の處で飛卷の様になつて落ちる、客は一應の流しがすむと休憩所に来てお茶だのお菓子煙草だのをたしなみ、伴をつれた時には二人でさうして樂しみ、暫らくして又は入りのたければは入る、床屋が入用ならそれも有り耳掃除も來れば按摩も來るし足の爪掃除も皆注文次第で來る、それを一切やつて先づ一人前二圓見當、斯うして客は二時間三時間或は半日

風呂で遊ぶ、但し七歳にして男女席を向しうせずと教へられてゐる支那であるから、男女帯同でははるごき罷りならぬと規則で決められてゐる、併し女が男の風に扮装して行く分には決して咎め立てはないと云つてある、之も形だけを重んずる支那式でも云ふのであらふ、斯ふした風呂だから風呂に行く人々の心持も日本人あたりの性急なのは余程趣きを異にしてゐるので、先づ友達に手紙或は電話で勧誘して相談まこまれは直で出かけ半日ばかりで遊んで歸る、而かも最初風呂屋へは入つた人が風呂を済して出て來る時には別人のやなに綺麗にサッパリこなつてゐる、その代はり毎日のこは愚か一月に一度と云つた程度です、其かはりにいざ一度風呂には入るこなるこなるこ極端から極端に爪先から臍まで生れ變はつた様になつて來る、ここにも國民性の一斑がよく現はれてゐる。

る。
女性が人に肉体を見せること云ふことも表面では非常によくないこと、昔から習慣づけられてゐる。尤も女性の足なき見た日本人は極めて稀である、尤も山西省あたりで或る縁日に未婚の娘達の市がたけ、娘達は脚を出して並べて横臥してゐる。嫁娶の婿は其脚だけ見て嫁を決めること云ふ習慣もある。そふてはあるが……だから日本に留學した支那の令嬢が洗湯地には大困りをするので随分面白い話もある。上海の鐘紡あたりも支那職士の爲に立派な風呂を設置したが、女職工がなかなかは入らないので最初は随分困つたそふてである、近頃は大に喜んで入るこ聞いてはゐる、何さま西洋婦人が乳のあたりまで出して歩いたり、海水浴をやつたりするのこは随分かけはなれたものである。果してぢぢらがい、のやら、日本の新人にてもきかね

は僕等にはうかき答は出來ない、序に足の爪掃除のこを一寸紹介するこ、これも西洋ではあるそふだが日本ではまだない、此の爪掃除と云ふ職が神聖なる勞働の中でも支那では一番下等なものこせられてゐる、耳掃除と爪掃除は何れも道具は簡單であるが辨慶の七つ道具の様に數々持つて來る、そして大まかな支那人には似もつかぬ纖細な手際を見せる、僕が初めて此の爪掃除人の厄介になつたのは確か三十五歳の時であつたが、生れてから一度も又ものを觸れさしたここのない肉と爪の境界を、生血が出さふて出ないまでにかすかに爪もこれば厚い皮も削りこる、そして其の爪先が赤坊の時代に生れ易つた様になる。

さうも不思議なこには、支那人は多く手の爪をこらないで自然に放置して長くしてその裏面には入墨ひでもした様に數年前からの垢を附着せしめて平氣でゐる

るのが普通であるのに、足の爪はかきかぐも綺麗に掃除するのはさう云ふ譯が僕には判然たる答がきない、之は或は次の様な理由かもしれない、それと云ふのは支那人は一般に足を大切にし婦女子はいつも靴下で包んで素足を見せない、そして毎日顔の次には足を洗ふ習慣である、又手指の爪は勞働者のは自然に折れて伸びないこになるが、非勞働者即文人と云ふは勞働をしない爲めに自然に爪は折れるこなしに伸びる、昔から文人を尊ぶ風習の支那であるから、爪を長くして居るこは我は文人なり高等人なり、勞働の如き、卑しきこはせぬものなりこの他人に對する自己証明もなる、先づこんな處から由來してゐるものにはなからふかと思はれる。

る漁夫の背後に今一人の手網を携へたのが待つてゐる。云ふことによつて獲ものの稀にあることが知らる、譯で、つまり現在手網を動かしてゐるのが一尾の獲ものでも獲た時は即ち背後に待つてゐるもの、番になる。云ふのである。又手網を流に従ふて動かすのは一寸見て可笑しく思はれるのが、實は急流のまごころのみならず、縁じて岸へりは逆流があるので、其逆流を利用して一寸先き間の濁流を、岸を唯一の頼みとして何處も云ふ當もなく上り行く魚が、可憐な小供の戯れごこのやぶな頗る原始的な幼稚な此手網にかゝるのである。斯して岩頭に躑躅して手網を使ふ漁夫それは確に支那気分と兩齣の趣向を表現したものである。何時だつたか漁夫に聞いた話だが増水期には流が急なごこの魚が散在するのにて漁獲は減るが、減水期になると之と反對に漁獲が増し市場の魚相場も冬期は半額だ

扱ふ時少し虫の居處が悪いくさか、動物の行動が氣に向かないごこのを、すぐ毆る蹴る、そして自己の意思通り動いた時でも之を當然のごことして其動物に報酬を興へるごことを忘れる……尤も斯うした風習は日本人あたりでは、一寸でもボロが出るがボロご世間に誤られた程度でも、すぐ一廉の人物を左遷したり首にする、之に反しい、方のごことはこれ當然なりと取扱ふやぶな高尚な對人的哲學を持つてゐるのだから、自然に動物に對しても斯うした扱方に出るやぶに風習づけられるのかもしれないが、動物にまで國家觀念や忠君愛國心を強いるのは、如何に君子國であつても或はちご酷であるかもしれない、そこになると支那人は對人的にも頗る徹底してゐる、だから日本人あたりから見ると露骨にも野卑にも見へるが、併し支那人自身はさうは考へておらぬ、日本人の見た野卑や露骨を當然なりと動

と云ふ、鶏卵などは支那では夏の方が安値である、其譯は生産過多で早く賣らねば腐るからだご云ふ、何もかも桁違ひごハメ外れの多い支那では、日本人選にきかせたら馬鹿云へ間抜けめと罵られるやぶな、他國ごは丸切り反對の現象も尠だ少くないのである。

動物を禦するに巧な支那人

支那人が動物を飼育にしたり駕禦するごこの天才的ごことは例の悠長で忍耐強い性質から來てゐるごことは勿論であるが、其外にこれはご嘔つき上手な亦嘔つき馴れた支那人が動物に對して嘔をつかないごこと、及殘忍なごことも心得た筈の支那人が、自己の驅使する動物に對しては濫りに打毆るご云ふごことをしないごこと、此二つの点は確かに動物の飼育に巧みな理由として見出しはならないものである、性急な民族になると、動物を

定してゐる……のみならず却つて驅したり蹴ご苦じめるやぶなごことを屢々面白がつする。

之を支那人の場合に見ると自分の手に動物が馴れない内は大抵の動物の我儘は我慢する、少しでも意の知く動いた時はすぐ撃撫してやり一仕事した時は必ず食物を興へる、下等なる動物心理はそこで漸次に其報酬に釣り込まれて遂に主人の氣質まで飲み込み主人のために忠實なる下僕ごなるに至るのである、試に支那人家の家畜割を見ると、老幼ご、犬豚ご、牛馬ごは、一家族同様ご云つた形で、驅使するに當つても其命令詞が單に符牒にあらずして言葉であり、話しかけてゐる、彼の馬車馬を禦するごことに於ては支那人は世界一だご云はれる、假令へそれは大なる名譽はないにしても事實は正に事實である。

荷車でも耕作でも一つの車に馬、驢馬、牛、騾馬、水牛

犬なきが仲よく前後左右に列んで挽索につき、禦者の用ゐる一本の長い鞭の心地よい音のまにまに各動物の挽索が何れも弛みを生ずることなく平均に公平に歩み進む、その手際の如き一つのハンドルで大機械を操縦するよりも熟練を要することであり趣きのある圖である。

支那では一般社會が官邊の保護に浴せない代はりに、随分解放された處もあつて、法律甚だ云ふやぶな人間の作つた制限なり制裁からは余程自由になつてゐる点が多いのであるが、丁度それと同じやぶに牛類でも、馬類でも、鳥類でも、支那では鼻環とか轡とか鎖とか緊繩と云ふやぶなものを用いることが尠しい、あるにしても極めて簡單である、日本あたりのやぶに動物が罪人になつたかのやぶな待遇は受けないやぶである。北支那方面では蒙古河南山東は牛の産地であつて、そ

れが天津と青島に出廻るのであるが、嘗て日本の山東駐屯軍が野外演習をしてゐた時、平原の遙かかたに五体のしれない意外の大軍が移動しつゝあるのを見て、隊長驚ろいて之に對して配備をさらんごしたら之が數百か數千かの牧牛の群であつたことば話を聞かされたことがある、山東の地は昔かの即邊で單馬の戦術が演ぜられた歴史がある位だから古來牛の産地であつたことに誤りはなからふ、今も青島肉は可なり日本の肉屋に儲けさしてゐる、此等の牛群は鼻木だの繩で驅られるのでない處が支那式である、一本の鞭は少なくとも牛の十頭位を相當する、又内蒙古あたりへ旅行をするに山間の溪流に沿つて羊腸たる細道を辿るとき、一角廻つて突如として雙角兄弟な牛群に出くはす、それが一人か二人の鞭に驅らるゝ三十五と云ふ頭數而かも鼻木一本繩一條もつげずに相當もの凄いやぶ

きをして悠々進んで来る、併し多くの場合牛列は從順なること羊の如くである。

群羊の行軍に出會することも勿論屢々ある、之は又二百三百群列をなし恰も波うつ如く小走りに、我遅れじこみ合ひへし合ひして牧人の鞭と命令詞通り進む、其二人の牧者に就て自分の逐いつゝある羊の頭數を賢ねるに甲は百七十八と云ひ乙は二百余まりと云ふ、何れも判切りに羊の頭數を知つてないのに變りはない、其次ぎには最蒙古氣分濃厚なる駱駝群の悠々又泰然たるに出會する、此等は多く一群十頭から二十頭で牧者は先頭のものに誇り、殿りものには神代から傳來と云ひたけな原始的な銅鑼と鈴のまがひもの、やぶな歩く毎に非音樂的な音のする、まあ鈴と云つたのが首の處にぶら下げられてゐる、之は先頭なる一人の牧者が後方を顧みることなく駱駝の脊上に強き組來なる

葉巻をくゆらしながら、其の鈴の音により全駱駝の續行し來ることを刻々に知り得る工夫である、殊に之が倏忽として起る名物の黃塵とか、濃霧に襲はれた時に特に全効力を發揮するのである、沙漠地に行くに今少し入念で各駱駝の尻尾には小綱をつけ其綱の尖に管をつけ後ろの駱駝の鼻に嵌め各駱駝には石油罐大の鈴を頸につるす癖ふするに何れか一頭が止まれば鼻の管が外れ隊列の切れたことが鈴の音によつて知れると云ふやぶに仕組んでゐる、又驢馬の行列にしても之は又行くべき道をよく覺わてゐるものを見へ、各脊上に相當の荷物を載せながら案内者もなければ繩もつげずに十數頭がコック／＼と歩む、而かも其各を注視して見るに歩むこと以外には目的地に到いた時食物に有りつけると云ふことの外何事も考へてゐない云つた調子で側目一つ振らずに隊列の中央部の一頭に跨つた主人

の適時命ずる言葉によつて進んでゐる、そして又主人は駱駝や驢馬の耐久力をよく知つてゐて決して過重なものゝ春負はせない、それが駱駝の場合になると、出發準備として坐らして置いて荷物を春に載せるのであるが、常に遠道の旅のことであるから、駱駝君の春はどれ位の重量以上は逆も耐へられないと云ふことをチャーンと心得てゐる、そこで主人の春負はせた荷物が此分量を超過するに主人が幾ら起たそうとしても起たない、主人は仕方なしに其分量を減じてやる、それが自己の耐久力まで来た時、幾つな恰好でムツクリと後脚から起つ、實に身の程をよく知つてゐるものは駱駝である。

野ふた、牛群、羊群、駱駝別に局地局地で有難からぬ地方官吏から釐金税と云ふ通過税を徴しおけられる、その税はもとより貨物に就てゐるが羊の如きは羊

そのものが贖買品故一頭毎に羊頭税がめし上げられる譯である、張家口で一頭二元五十仙の羊は北京まで來るに六、七位になる例である、そして此獸列が人通りの多い帝都北京あたりに出てくる、日本あたりでは皇選警察の御厄介になる譯だが、偉大な雙角を所有した牛列が繩一本つげずに牛歩緩慢々市中を歩くと、併し別に往來の人々を傷めるやぶなこともなく警察官も別に怪みも咎がめもしない。

文化人たる支那人は眼中一丁字なくとも鳥を聞いて樂むことを心得てゐる、そこで飼鳥の多いところは支那に來たものゝ氣附く處である、その飼鳥の馴らし方によつては、又非常に氣の永いもので一羽の鳥を馴らすのに一年も二年もかかる、其代はりよく馴らしたものに成るに丁字形の止り木に糸をつげずにさまりして方々に持ちまはり、豆の餌を空中に放り上げる鳥は其止

り木を離れて空中で其豆を銜へて止り木に歸る、偶此鳥が放れて飛んだ時でも此丁字形をそばに持つて行く、それに来て止まる、其他什込茶筌で色々な藝當をやるのがあつた、北支那の大家宅の門番などには相當年寄つたので冬などはむく／＼と黒い古綿の澤山は入つた支那服をあがきがこれぬほき着用に及んで、唯かし芳香郁らしい口を所有した老爺がおこす頭巾の襟なのを破り、よごれた口髭に水盥などを無作法につけて、客足の暇に手飼鳥の鳥籠を門前の樹の枝に懸け、ラオの長い煙管から吸ふた煙を極めて自然に吹かしつゝ、その鳥の歌を聞く、此風情を見るに籠の鳥でも日本あたりの籠の鳥を見て感ずるやぶな牢屋と云つたやぶな感じが起らない、何んかなくとボケ顔で聞いている主人に同化されて籠の中になつてもさほさ苦にしてないよぶに感ぜられる。

此場合此老爺は決して「ニュージック」なき云ふことを解してゐないのは申迄もない、近頃日本の「ハイカラ」な夫人、令嬢嬢や若い新人などが、よるころはるる六ヶ敷い西洋名前の「ソアラノ」だの「アルト」だの「テノール」だの、さも音楽趣味を解したかのやぶに嗜やくことを社交とか文化生活だなきを考へてゐるやぶだが、心の内に眞に音楽を樂しむことに於て果して此老爺の鳥を聞く樂に優り得るであらふか、又春の朝なきよく見ることだが好々館然たる大の男が大きな鳥籠を天秤棒で擔いでフラ／＼市街を歩いてゐる、之は鳥賣りかと思つて賣ねて見る鳥を運動さす爲めに態々擔いで散歩してゐるのだと云ふ、此時此人は只もう鳥のこと以外に何も考へてゐないよぶに見える誠に春の日は長閑である。

鴉飼にしても支那のは足に索を附けたりしてない、舟

支那は私立學校

日本と支那と比べるに多くの点に於て官立と私立の學校に於て見るやうな差異を發見せざるには居られぬ、官立の方は規則が八釜しい代り學生の粒も揃つて居るが、私立の方は凡てがルーズで飛切り優れた小夥があるかと思へば物にならない多數もある、誰しも一見したずて支那と日本とをくらひ云へば日本の方が何れの点も優つて居ると云ふであらふ、それは恰度官立と私立の學校とを比べる時に起る心持と同じであらう、併し仔細に觀察するに日本にあつても飛切り偉大な人物は、却つて私立學校に見出さる、やうに支那には日本の及ばない程のものを極めて特種で極めて少夥であるとしても持つてゐるのではなからうか、試に一流のころを比べて見るに、日本巨人のレコードたる大砲方右衛門

から主人が棒一本つき出せば獲ものを銜へて其棒にまつて舟に歸る、獲もののなかつた時は再びもぐる、家鴨の群を驅つて一葉の扁舟で流にまかせて江を下る、家鴨飼ひの如きも實に支那人ならば出來ない藝當で、初めて江上で此手あひに會つて感心せない日本人は恐らくあるまい、此家鴨飼ひは亦悠長な点に於て御多分にもれない、漢口あたりから南京や鎮江の方まで下るのに可なりの月日を費やするふて、最初出發の時は小供の家鴨であつても目的地に達する頃には大鴨となる、のみならず道中で都合のよい地方で逗留をなさるに他所の家鴨もついで其群と一緒になつて來るので、下へ下るにつれ頭數が増るさふである、こうなるに悠長と云ふことも只暇つぶしだけの意味だと笑へないことになる。

君は一間と五寸だが支那では八尺五寸のが北京の三貝子花園の門番として生存してゐる。

梅蘭芳と云ふ名優の美形は一寸日本には見當るまい、支那第一の美人と日本第一のそれを比べて果してさちらに團扇が上るか頗る疑問である、學者政治家を比べてさちらが優つてゐるか之は一寸云へないが、外交方面などで時々日本が一籌を蹙するのではないかと云ふことは、近來の日支外交史上に見へてゐるやふでもある、道徳の高いのにしても日本の誰よりも高いのが居るやふに思はれる、又禮儀と云ふ様なところになるに支那人中少數の有識階級となるに世界のどの民族も及ばないであるふ、假令それは形式であり虚禮であるにしても、人間に禮儀あつて禽獸に之をなしたたら禮儀の正しいことは尊いことだ、時々僕等が支那人と交際して感ずることであるが、支那の來客に對してボーイ

がお茶を持つて來ると、支那人は起立して受けら、更に一時經つてお茶をつぎたす時は又起立して謝す、こうした禮儀の形式は物質文明にのみ生きる現代人には不向であるかもしれないが、何でもかてもが商賈式に「アーサンキュー」さか何んさか木で鼻括つた様な作法はハツキリしてはゐるが、なんもなく薄つぺらで人間と云ふ萬物の靈長さとしては余りに潤いも深々もない感があると思ふが如何なものか、兎も角支那は私立學校式にできてゐる、だから飛び切り少數は萬事につけて見出し得ると云ふ事は事實と思ふ、何んでもかても官學を尊重したがる日本人が支那を見る時の注意として私立學校式のつめけた長所のあるところを輕視してはならぬ、而かも國士夫にして人口多い丈に往々にして第一流品には諸他列強の追隨を許さぬ底のものがあることも見通してならない。

支那之看板

支那が文字の國であることは今更申すまでもないが、一寸支那幣に足を入れると金混雜かな看板が正裝をした美姫の行列でもある様に、入口を云はず二階を云はず顔をならべてゐるのに驚かないものはあるまい。之等を一々見て歩いて解釋を求めたらそれだけでも變に「研究」して發表する丈の價值があるであろう、併し僕等にそんな附はない、そこで珍らしそふものを拾ひ上げて全般を推すことにする。

菓子屋を讀くと「稻香村」と言ふ看板を出してゐる、酒屋には「聞香下馬小酌隨意」なき季太目の詩が何か、ら拾ひ出したのが多い、料理屋になると種類が幾多いが「上樓大吉山珍味」なき、食辛抱をあげずには置かない、風呂屋の「衛生盆、池浴堂」なきも奇抜であ

る、質屋は當、押典、質等と色々區別があるが比較的簡單に片附けられてゐる、寫眞屋が照相館、金物屋が五金號、中西大藥房は中外藥屋のことで、此の中西には初めて支那に來た日本人が大きい日本人の藥屋があるなきといふ初ぶなところを感揮する、雜貨屋は「東西洋廣雜貨」と云ふ昔から舶來品が廣東から輸入されたことを語つてゐる。正札懸値なきが「言無二價」又は「一言堂」なき言ひ、又「萬聖無欺」なきも其の例である、懸賣お断りが「一律理錢不許陰欺」發賣計は「總批發所」で卸小賣は「兼賣出管」である。

「ビール、サイダー、アイスクリーム」は啤酒汽水、氷淇淋と漢字でやつつける、日本では「かしや」と斜に貼紙をすなところを「吉房招租」と書き、工場の門前には「工場重地閑人免進」と仰山らしく書く、此處小便無用に至つては巧妙で「君子自重小便遠行」と對句

て片附ける、其他數限りはないが諸君の自發的研究に待つことにする。

支那人は天下人

支那人は天下人である云ふことは國家人ではなく天下の個人である云ふことを意味する、併し支那の有識階級はよく「爲國家」を口にする、それは洗晒らして云へば個人慾を満足せんが爲に云ふ口頭禪である場合が最多い、支那人が野原に一本一本生へた草のやぶに、又河原の砂のやぶに個人生活を營み闘争力を欠如してゐる云ふことの根本原因は、實に此天下人なる觀念に發するのである、隨て統一云ふことが不可能になりたがるのである、日本人の場合で云ふと近頃は中々きつして個人主義が跋扈はしてゐるもの、各人

の頭のぎこかに國家と云ふ二字が根強く烙印されてゐるつまり各人の頭頂から國家と名づくる糸目が一本宛てとられ、其端の集まつた處が帝の御手にしつか握られてゐる、併し其糸目は決して頭髮を辨にしてひつ掴かんで引摺り廻す様な無理強制なものではないそれは極めて自然に各人の頭から無形の糸が雲上へ生々伸びて高天ヶ原にお座します帝の御手に掴みつゐる云つた關係である、だから日本人の場合にあつてはそこに皇室中心と云ふ國家觀念が生れ、眞の忠君愛國が生じ、何事をなすにも個人の利害の外に國家と云ふ觀念が頭の内に閃く、而してそれは苟くも日本人と云はるる各人に普遍に流れてゐる血であり觀念である。

處が支那人の場合にはこうした國家觀念はないことは云はないまでも極めて薄弱である、而かも本年支那を廢

環境に身を處する支那人

視し支那人に接し内輪を見るに伴つて、更に其感が深くなるばかりである、尤も今少し永く辛抱して見てゐる内には迎り越した境地に支那人の國家觀念を見出すやふになるかもしれないが、慄むらくは僕はまだ此年明に達してゐない、だから現代の所謂支那偉人なり巨人なりが「爲國家」を呼號しつゝ、日夜に譁策し發裏に策動し、或は軍を東北に進め或は軍を西南に旋らし朝に架射を弑し朝午に馬殺を斬り夕に良狗を煮る、而かも第三者となつて之を冷視すれば、國民革命も爲國家も救國救民も國利民福も高唱する處只之れ一種の職業を見ゆ、由來日本に政商なるものあり政治を弄して商利を貪る、支那は大國なり豈に政商のみに止らんや、更に軍商ある決して不忠誠にあらざるなりと云いた

世間には支那人は斬腸の如しなきと笑ふ人がある、それは何故か云へば終始色變りがするからだ、然し良く考へて見れば確乎たる法律も人權の尊重もされない、現代支那では、人は環境に依つて身を善處して自己保全を圖る外適當の道は見出し難いと思はれる、畢竟色變りとは對環境善處と云ふことである、例へば鉄砲丸が飛んで來るこするこ群衆は逃げるかそれ共逃げる場所が無ければ成る可く低く備伏になるに相違ない其時逃げもせずぼかんと起立してゐる人があつたらそれは馬鹿である、又有金の幾分を提供せねば察敵せぬぞと云ふ智慧ある虎が出て來たならば誰しも金を投げ出して命の安全を圖るだらふ、此の場合其鉄砲なり虎なりに對して不馴と文句の云へないのが英國の現状で

あつて見れば群衆は雨であらふ風であらふこ其時の狀況に即應して被害を最少限度に切詰める外に道はない、こうした考へから環境を看取して自己善處を圖るのが支那民衆の色變りである、こゝに支那人の雷同性も生れるし無主義無節操も生れる、考へて見れば案外罪のないもので虎の持行き處がないから隨時即應の善處法を適應するのみである、寒暑定めない氣候風土であつたこしたら、四季の何たるを問はず寒い風が吹けば毛皮の着物を着、陽氣が替れば單衣物を着る様に風の吹き廻しや陽氣に應じて臨機即應の工夫が肝要であるに決つてゐる、若し革命と云ふ熱い風が吹けば我も我も革命團扇を買ふ、共產舞踊と云ふのが流行して來れば御無理御尤で跳る、反共と云ふ寒い風が押し返して來れば團扇を捨てて襟巻を買ふ、凡そこゝ云つた風に現れて來る事象の是非を問はずに之皆自然

の支配であるこ考へ、之に相應の適法を工夫し、非なるものに對しては消極的な阻止反抗を工夫する、斯云ふ風であるから支那の天氣が如何に變るかと云ふ事を觀察するには、色變りに巧みな支那民衆の機敏な兆候に注意することも必要の一つである、

こゝに注意すべきことは所謂爲政階級なるものが變暑の風を吹かせるこ云ふこと、其風が邪である時民衆の消極的反抗に對して爲政階級の態度が案外脆いと云ふことである、云ひ換へれば爲政階級の批體的困惑と民衆の之に對する懸策とは微妙な因果關係をもつてゐることである、之を近い例で見るこ革命と云ふ低氣壓が共產黨と云ふ特殊な伴ふ下層から革命風を巻き起した、そゝするこ低氣壓の進行路にたつた湖南の民衆は、南嶺の一角に早くも頭を顯はした低氣壓來の兆候に對して身仕度をした、虎が此の低氣壓によつて



滋雨を惠まれた階級と旋傘にあつて駆けられた階級
 とがあつた。前者は無闇に持舞し後者は天災同様諦
 めねばならなかつた。處が一度惠まれた滋雨が暫らく
 にして酸性を含んだものであつたことが明白になつた
 。そこで民衆の消極的反抗心が雨後の大地から蒸發す
 る水蒸気のやふに立ち昇りだした。そうなるに此種の
 の反抗に案外脆い低氣壓は容赦なしに旋傘を振り棄て
 た。のみならず更に余毒に對する反抗心に對し遂に降
 伏を余義なくされ、低氣壓は今や舊來の大氣の裏に消
 めるが如く和し去らんとしてある。こふ云つたやふな
 譯で爲政階級が氣受のよさそふな風を起して民衆を吹
 きまくるが、民衆の消極的反抗が強ければ遂に其反抗
 の前に降伏し回訳せんさへするやふになる。
 此の消極的反抗が云はゞ眞の民意である、之に反し彼
 の爲政階級の投機的思惑によつて起された風に普處せ

んとする民衆の一时的變色法は決して眞の民意を映發
 するものではない、支那に於ける民意は地味ではある
 が韌強な最終の勝利者であることは見違してならない
 ことである。

日本あたりの高等階級で支那の民意を喋々する人が澤
 山あるのを言論の上でよく聞かされるが、民意尊重
 に然るべきことであつても、履き違へた民意を捕へて
 意見を誇るが如きは其の愚や自己一身の不名譽たるほ
 かりでなく、往々にして果を自國國家に及ぼすことが
 ある注意すべきことである。

日本人の解し難い支那語

漢字は支那が本舖であるが日本人が知つてゐる漢字の
 意味だけでは解釋のつかない言葉も少なからずある。
 例へば犬なきも古文では犬とあるが今は狗子と云ふし

バクついて其上に酒錢を稱して名々に銀貨をせしめて歸るのであると云ふことが判つた、之れも矢張り保護である、又阿片は支那では作ることも吸ふことも國家の法律で禁ぜられてゐるのに、官憲なり軍隊は作ることを保護し吸ふことも煙箱と云ふ阿片吸所の開店を許可して大まいの免許料をせしめる、勿論原産地から市場への阿片の輸送には保護の軍隊が砂糖袋にくつ付いて行く蠅のやぶにくつ付いて保護料をせしめる、そして之れ等も矢張り保護するに云つてゐる、賭博に關しても之と同巧異曲の保護が興へられて居ることは殊更申す迄もない、黎元洪大統領なども辭職を迫られた時は度々保護されたもので、無賴漢を集めて銅貨の三〇枚もやり黎さんの邸宅の周圍を包圍しておいて、而して曰く今や民警閣下を離れ閣下の身邊危険なり官兵を差向けて之を保護すご、黎さん逃出さざるを得ず、北

京を落ちて天津に下るご、又々停車場の客車の中で一晝夜も保護され、其護衛兵にまもられて邸宅に監禁となる其他裏面に入つて詮索すればまた色々の保護のあるごは、管に軍隊や官吏のみならず司直の筋にも澤山に見出されるであらふ、只僕には詮索の暇もない。

見かけと中味

有らゆる点に於て見かけを先にするごは支那の國民性であるご云つて差支あるまい、此事は今日までの僕の話しのなかで廢話して來たごとはあるが一つの話題として話して見るごも強ち無益でないご思はるごので茲に新に一題目を掲げる次第である。

泰山鳴動して鼠一疋と云ふごも實に日本だけでなく、本師の支那では甚度あるごで鼠一疋出ないごさへも決して稀ではない、中味を先に吟味せんごする日

本人ご見かけを先に撃へんごする支那人ごは正に正反對である、併し正直な日本人の中では見かけに眩惑されたり空砲を聞いて實弾ご思つたり撃を聞いて實を見ない人々も少くないやぶである。

日本からの一旅行者が支那に來て上海から重慶まで汽船旅行をして、足を陸上に踏むごなしに沿岸各都市を視察したならば、支那の各都市の凡てが外見に於て現代日本人の尊敬しつ、ある西洋都市に日本より以上に似てゐるのを見出すであらふ、上陸した人々にしても外國租界ごか舊租界ごか支那街の目抜き街だけを見た人には意外に文明式ご云ふ感じが起るであらふ、併し今一步を進めて所謂純支那街に歩を入るごなるご外観した堂々の光景に比し内味の頗る不愉快なのに失望するであらふ、次に支那旅館に宿らんごする時東方大旅社ごか亞洲大旅社ごか銘打つた旅館の前に立つて

建物の堂々たるに一驚するかもしれない、趣が既に館内に案内されて宿つて見るご、見るにつけ食するにつけ外觀ご内味ごは月ご蠅の差ある不愉快を感ずるであらふ、逐一例を擧げて云へば支那ご見かけご中味の隔りのある國は少ないごを知るであらふ、巡查にしても兵隊にしても官吏にしても之れご見かけご中味の違つた國はあるまい、繰返して云ふが此の見かけご中味の使い分けをする支那の風習をよく心得て置くごは最必要な事の一つである、何故ごなれば外交にも内政にも交際にも道德にも言論にも文章にも有ゆる場合に見かけご中味の相違の大なるのが一般の支那であるからである、斯く云へばごて何てもかても支那の物を見て之を逆に取れご勸めるものには決してない、物によつては支那料理の様に見かけは悪くても味ひの馬鹿に良い物もあり名實相伴ふものもあるにはある、只

そふした氣持で支那を見、支那を讀まねば、馬鹿にされること云ふ迄である。

黨 同 伐 異

由來支那人は極端な個人主義ではあるが、其の一面に於て黨同伐異さか朋黨比周云ふ文字が古來使はれてゐるやぶに、字義通り徒黨を組んで互に結合したり排擠したりすることが甚多い、如何に個人主義の塊りのやぶな支那人でも、社會生活を營む以上全然孤獨ではやり切れないので、何か少し大きな事をするには徒黨なり團體なりを要する自然の要求に迫られる、そこで彼等が作る徒黨なり團體云ふものをどんなものかを見て見れば、家族、親戚、縁者、朋友、同郷、同學、同期等で、此外共同の利益を維持増進する爲めには意外に強い組合さか團結を見るのである、畢竟個

人主義の強い相互信用の濃い支那では、何等謂はれなしに徒黨を組むことは六ヶ敷いことであるから、自然前に云ふやぶな關係をもつて或は結束し或は排擠して自己の欲望を遂げるに便せんとするのである、親戚縁者朋友等の結束は人情さして別に不思議のない處であるが、國家觀念なき支那人が同郷、同學、同期なき云つて結束し、其結束同志相排擠しつゝあることを研究するのは頗る興味のあるもので、現在の政局の動きも實に此等の關係に立つ徒黨朋黨が、結束し又排擠しつゝ、政權なり軍權を握らんとする處に生れるのである、最近の南方側時局に就て見るも、同郷關係に於て廣東派、廣西派、浙江派、湖南派なき云ふのが、それであり、同學に於ては日、米、英、佛、獨、露等への留學出身例の如き、又軍人にありては留日士官派、保定軍官派、京北陸大派、黃埔軍官派、行伍派（卒伍士馬

賊出身の代名詞）云ふ様なものがそれである、海軍に於ては福建閩、廣東閩、山東閩、留英米閩、（多くは福建閩）留日閩云つた様なものである、此等の派は時に消長盛衰があるので往年留日士官派が大に勢力を振つたが、現在では保定軍官派全盛で廣西派軍人さ湖南派中唐生智一派の如きは保定軍官出の塊りである。

北京陸大派はさ程團結していないが藩籬として敵味方に巢食込んで離合集散に關しては輿幕として重要な役割を演ずる分子である、黃埔軍官派は蔣介石の創造したもので速成軍官で、まだ歴史も淺く人數も少ないが年々氣鋭の士が多く此一二年廣東本定續て北伐の先驅をなしたことは周知の事實である、留日士官派は奉天派に於ては可なり大きな勢力を持つてゐるが、南方に於ては往年の意氣なく結束も認め難い状態である、それでも時々此糸を通つて大きな変局の筋書が出来る、

ともある、此上更に同期云ふことも利用されるのである、只注意すべきことは日本あたりの同窓さかクラスメイト云ふのは大いに趣を異にしてゐるので、極めて支那風に融通のきくもので、時には敵ともなり又味方ともなり、又同學だの同期なきが敵味方雙方に入込んでゐるのであつて、此等が雙互に共同の利益を前にした時にのみ、特に同郷さか同學さか同期さかを互に強調しつゝ、手を握り合つて悦んだ顔をする。

處 士 橫 議

處士横議さか非毀慷慨云ふことは古來支那でよく使はれる言葉で、是が行はれる時は亦最も始末の悪い時である、然らば其はどんなことであるか云へば、一口に高等遊民さか智識階級さか讀書社會さか名付けらる、階級の勢を得ざる時が非毀慷慨さなり、不平の發

したものが處士權議なるのである。
 古來支那統治の傳統は徳治に仁政に無爲にして化
 すまか云はれるが、其實「知しむべからず依らしむべ
 し」云ふ愚民政策に歸着してゐるもので、爲政者は
 知つて依らざる高等游民階級なるものに迷惑もし是を
 邪魔者扱ひにもした、愚民政策が一度成功するに農民
 は恰も羊の如く従順に黙して働いて其汗の一部を命ぜ
 らる、儘にお上へご上納する、そこでお上は其上納品
 に依つて榮華も贅澤もやつて天下泰平を國土安穩と
 か云ふのである、斯の如き愚民政策を邪魔するものが
 即ち知識階級であり讀書階級であるから、古來爲政者
 は此の階級を如何にして始末するか云ふことに骨を
 折つたのである、支那史上最有名な秦の始皇帝が當
 時生きて居つた儒者を残らず捕へて生埋めにし、あら
 める書籍を探し求めて悉く焼いてしまつた、是は農民

博士號よりも得難いものである、現在有名な譚延闓の
 如きは翰林院編輯の一人である、斯の如き幾度もの試
 験は六ヶ敷八股文で試され、其文を作る爲には汗牛充
 棟も只ならぬ澤山の書物を殆んど暗記する様に憶へて
 おらねばならない、そこで大抵の受験者は根氣が盡き
 る、中には四川や雲南から一年もかつて北京に出て來
 て落第するものも無論ある、それでも官吏と云ふ最も
 贅澤榮華の出来る階級にありつき度いが爲に、半生は
 おろか一生涯か、つても其の試験に及第せうと努める
 、斯ふした六ヶ敷い試験制度の爲に學者は其準備時代
 に於て漸次去學されるのであつて、やつと及第した時
 は多くは精力を蕩盡してしまひ「噫我が事成れり」と
 云つた風に落付き拂つて、民治と政治と云ふことは
 一向に働まないで、官吏と云ふ蜜の出る株に腰を落
 着けて是からが人世の花だまばかり贅澤三味のありた

政策の邪魔者たる讀書階級を極度に壓迫し處士權議の
 類を根絶せんとした最も明瞭なる實例である。

近代になつては清朝の君主康熙帝が始皇と異曲の
 科擧制度を云ふのを發案して愚民政策の確立を圖らう
 とした、彼と此とは時代が二千年も距つておるだけに
 前者の露骨にして野蠻なるを、後者の婉曲にして狡猾
 なるを、古今に亘る好個の對照である、科擧と云ふ
 のはきんごころと云へば、七むつかしい高等文官試
 験であつて、ざつと説明すれば郷里の塾で自宅に相
 當の教育を畢へた者が其の土地で試験を受け之に及第
 した者が秀才と云ふものになり、それが各省の政府の
 ある所で再び試験を受け之に及第した者が舉人となり
 、それが又北京に赴いて試験を受け及第したものが進
 士となる、その進士が更に皇帝親裁の試験を受け之に
 及第されれば翰林院編輯となるので、日本で云は、文學

けを盡す尤も斯ふした間に少數の傑物も出るには出た
 、斯の如く六ヶ敷試験であつてみれば及第する人は極
 めて少い筈であるが、それでも相當の人数が實際に於
 てあつた、それは試験官が賄賂に依つて手心をして及
 第させた官吏の少くなかつたこと、それから所謂町人
 が有望な秀才を擁して是に資本を投じ官吏にまで及第
 さし、それが知縣とか道尹とか巡撫とかになつた時に
 、それを結託して前に投じた資本を取返すと云ふ方法
 も行はれたからである、

走馬燈

走馬燈とは近頃日本と支那とを往復する手紙の内に殆
 ど例外なしに書かれてある必要字句であることに誰し
 も異議あるまい、併し走馬燈があまりに流行する爲め
 に、つい支那の時局と云へば走馬燈の三字で片付け實

辭の事實に至つては一向に了解してゐない向きも決して少なくない。そこで僕は今から近年の實例によつて走馬燈を説明して見ることにする、大正十三年初秋所謂段孫張の三角同盟と曹、吳中心の直隸派とが争覇戦を始めた時、浙江の盧永祥と江蘇の齊燮元とが上海と南京で頑張つて對戦約二ヶ月、戦は遂に盧將軍の敗北となり盧は上海を逃出して別府に亡命の客となつた、そこで戦勝の齊將軍は永年垂涎の上海金穴を自白の手に收むることが出来た、然るに前門の虎を逐ふた齊將軍後門の狼を防ぐ由もなく奉天軍は北に吳佩孚を破り綠林大學出身の勇將張宗昌を先驅としてズリ／＼と山東から安徽へ次ぎ江蘇へ追つて來た、形勢がこうなるに別府で悠遊の盧將軍何時しか奉天潰れてこ出かけ、張將軍の御宣託があつて奉天から南京へ乗込み此度は上海の齊將軍と南京の盧將軍、もの、二ヶ月を経たない

内に雙方位置を代へて再び鐘鼓の間に現れることとなつた、其結果此度は齊將軍敗北に終り盧將軍の跡を亡命の客となつて又々同じ別府に悠遊の身となつた、最近齊將軍も盧將軍の營で逗留したと同じ宿に同じ湯を浴びた迄前車の覆轍を踏んだのではなからぶが走馬燈にしても廻り舞台を見ては確に出色の一例である。吳佩孚將軍が驍名を馳せたのは大正八年夏直戰に見事段孫端派を一蹴した時からであつたが、此將軍は武人政治に干渉せよと云つて歴史に古き河南洛陽の地に武を練り兵を養ひつゝ、遂に北派の政局を支配した、其吳將軍東北の猛將張作霖將軍と雌雄を決すべく洛陽を出て二度迄も京津の野に三軍を叱咤した、最後の戦に馮玉祥將軍の裏切りから山海關の戦線又々難くして、あはれ嘗て常勝將軍今敗軍の時さなげ無念の怨涙を戎衣の袖に拂つて天津を落延び、海路長江に入り南京を

經て漢口に遶江し次て舊の古巢洛陽に歸り着いた、其後の吳將軍に就ては、こゝに話す必要を認めないから話さないが洛陽の都を出て、海路大迂回をして舊の都に還る處正に大きな廻り舞台を自ら演じつゝ、あるやぶな心帥がする。

北方に根を張つた北洋軍閥の亞流と南方に新起した革命軍閥との中間に介在して偉大なる惑星と見られてゐる現在の馮玉祥將軍も、其昔湖南常德にあつた一旅長て名を擧げ、陝西省には入つて督軍となり進んで河南督軍となり、吳佩孚將軍と兩雄河南に並び立ち難くして北京に逐はれ、其怨みを大正十三年秋の第二次奉直戰に於てお得意の寢返り藝當に於て報い、一躍して北京の政權を掌握し將に支那の「トロッキート」たらんとした、然るに赫怒した張さんご捲土重來の吳さん犬猿の骨を忘れて討赤提携の軍を進め、之がため遂に京津

に破れたる馮將軍敗軍を率いて京綏線を新疆省方面へ落ち延び、蘇都に遊んだりした後又ボツ／＼と數年前に古馴染の陝西省に南下し次て湖南省に出て、折から唐生智軍が奉天軍を敗つて鄭州迄着いた處へ數から棒に馮將軍「河南は乃公のもの」と奉固を突出し、今や南方革命軍を道件に抱込んで再び北京入りの夢を浮べてゐる、試に支那地圖を展べて馮將軍の足跡を追つて見ると、山西省を中心とした支那の西北を數萬の軍隊を操りて行脚一週したことになる。

近く蔣介石將軍の率ゆる所謂國民革命軍の濫刺たる芝居にも味がある、最初蔣介石將軍唐將軍を援護して廣東から湖南へ攻め込み、唐將軍は武漢を略し蔣將軍は江西に孫傳芳將軍を破つた。さて斯ふ兩方が成功すると共同の目的たる革命のことは第二義に浴ち第一義の權勢争ひが始まつた、遂に武漢政府と南昌政府は喧

嘩別れの幕となり、蔣將軍金陵には入つてからは所謂漢寧分立となつた、然るに此漢寧の両方に於て更に分解作用が起り、南京に於ては蔣將軍の浙江派と李宗仁將軍（實は白崇禧黑幕）を首領とする廣西派が暗闘を始め突如として蔣將軍の日本亡命となり、武漢に於ては唐將軍と張發奎將軍の暗闘となつて張將軍廣東に逃げ歸り、寧の勝者李將軍と漢の勝者唐將軍更に干戈相見へて唐將軍の日本亡命となり之を引替へに蔣將軍南京に復活、今度は南京の蔣將軍と武漢の李將軍争覇の幕に入つた、此幕に於ては手馴を云へば李將軍亡命し之を入替へに唐將軍復活と来る處であつたが、樂屋の都合にあつて李將軍なか／＼負けては居ず、大手搦手から返り咲きの蔣將軍の裏を掻き、茲許而互に表面朋友肚裏犬彘、何日何時牙をむき爪を出すか計り難い云ふ昨今である、此間蔣將軍は廣東を出て右廻りに

觀じ來れば支那時局が走馬燈の如く見ゆるのも全く無理からぬことである、まだく軍閥の一起一倒と盛衰を共にする政客の消長去來に至つては實力なもの手品師だけに轉變更に端倪すべからざるものあるは茲に特に申述べるまでもない。

吳越同舟

吳越同舟とか同床異夢とか云ふ熟字は、支那が本舖だけにこうした現象は屢屢見出される、僕往年北京時代、彼地の參謀本部々員等には澤山の知己があつた、當時吳佩孚の直隸派と張作霖の奉天派とが來るべき運命の命令通り、京津の野で所謂第一次奉直戰と云ふのを始めた、するに參謀本部の部員の面々何時の間にか旅行に出かけたて居なくなつた、其内に御多分に漏れ

湖南江西江蘇浙江まで進んでそこで一服と日本に一遊したと云ふところ、一方李將軍隨一の諜將白崇禧將軍は廣東を發して之は左廻りに福建、浙江、江蘇、安徽、湖北、湖南と戰爭行脚をなし郷里廣西の省境まで殆ど行着いて今や兩廣兩湖政策に懷中秘策余念なしと云つたところ、何れも走馬燈と名のつく支那舞台の立役者としては千兩の値ありと云ふべしである。

其昔宜昌に長江上游總司令たりし孫傳芳將軍、吳佩孚將軍の命を奉じて湖北江西を経て福建に出て次々浙江に地盤を固め奉天派の立役者楊宇霆將軍を南京に一蹴し、俄が大盡として南京に五省聯盟の霸王となり、蔣將軍と一度旗鼓相見へて勢競はず、今や山東省に奉天派の入婿となり馮玉祥軍を向ふに廻はして掉尾の一擊を準備せしところ之亦舊代立役者の面目を辱かしめるもの、

ず戰は昨日まで奉派有利を傳へ、今朝五時長辛店の戦線から來た人が論奉天有利を主張したが市内では奉軍大敗が傳はつて戦々兢兢の体、そこで某日本人が長辛店の方へ自動車を飛ばして現地視察にこ出て見る、何んの事はない七時頃一撃に奉軍汽車にて敗退した後であつたと云ふ様な譯で、僅か二時間の差で勝敗の雲行が變化してゐる、斯くて直隸派勝利を以て戦局が結ばれた、さぶする内に參謀本部へはぼつくと舊部員が姿を現はし始めた、甲曰く我は奉天甲、乙曰く我は直隸軍……何のことはない參謀本部其のものが吳越同舟である、恰度日本の大演習で參謀本部々員が紅白軍に分れて演習に参加したと同じこと、之が支那の戰爭である、近い話では最近長江の河川汽船は重慶から上遊迄何れの航海にも文字通り吳越同舟の客を乗せないことはない、招募にした處で支那を理解しない日

本人あたりが主人となつて、一度に澤山の支那客を招待した時には往々にして吳越同舟のこきがある、併し此場合支那人は決して犬猿を立合せた様な光景を表面には出さない、但し事情に通じたものから見るに随分變な局面を見せられるこきもある、これだから支那人が主人となつた招宴の多くの場合招待状の配付と共に、名單を云つて主賓陪賓の芳名録を同時に使のものに持たしてやる、そこで招待状を受けた人は名單によつて相客の顔振れを見た上で出席と否きを定めるのである。

同床異夢などは古來の常態であるが近代は時局が複雑で變化に富んでゐるだけ、何れの派も殆ど漏れなく同床異夢ならざるはない、某將軍と某將軍が北伐とか西伐とか東伐とかを共同でやる時も皆此類で、共同働作中は御互が一は家鴨の卵を、他は鶏の卵を暖めてゐる

る時である、これが早く孵化した時は家鴨の雛と鶏のそれと異つたものが生れて來ると云つた形、實例を擧げれば數限りない、近頃は中々露骨になつて來て吳越同舟同床異夢は大層の爲めには止むを得ずなき云つて、吳人が越人を承知つくて同し舟にのせたり同し床で寢かしたりして、機を見て寢首を搔くなぎのこきが普通のこきとなりつゝある、序に一言付加へて置くが日本あたりの暗殺行爲は暗から棒に兇漢の躍り出しによつて演ぜられるのが多いが、支那のは敵味方ともに警戒が重嚴であるから、中々暗棒式の離れ業は奏功六ヶ敷い、大抵は刺される人が招客となつて客に赴いてやられる場合が多い、それと云ふのは眞の眞の裏から表に謀を廻らすので、刺される本人は迷宮には入つたものが漸つて出口を見出したやふな、ほつこ安心したと云ふ境地に置かれる、こころがそふ思つた瞬間が即

眞の迷宮に來た時なので、光明に安心して進むと地極と云ふ陰謀がすぐ脚前にあるやふに仕組まれてある。併しました斯の如き場合でも金と云ふ災難除けが意外に命を救ふこきも支那ならずば見る能はざる妙境で、いつかも話した通り眞に地極の沙汰も金次第である、つまり刺すこきを請負ふたものは、成功の曉は報償が定められての商賈である場合が多い、だから命のドタン場になつて、イタチの最期屍式に札束を投げ出すと追手の方の腦中には其札束によつて電光よりも迅く商賈勘定が閃く、そこで此札束が請負の報償よりも大きかつたら危機一髪で打損じたなきと云つて先約に小便をする、圖々しいのになるこ其危機と云ふ所まで漕付けた功績からも割引額を頂戴せんとする、最奸のものは先約の勘定は別口で札束も召し上げて其上に止めを刺す云つたのも絶無ではないこのこきである。

羊 頭 狗 肉

羊頭を掲げて狗肉を賣るやふなこき是世界到處にあるので、毎日新聞や雑誌に掲載されてある、廣告を見ても一種の羊頭であるこきが判る、僅この羊と云ふ字は瑞徴を表はすので祥の字も善の字も義も美も皆之れ羊の字を含んで出來たものである、そこで好い意味に羊頭が使はれたので牛頭とか豚頭とかは云はなかつたものらしい、僕の屢々経験した推定から云ふと、羊頭狗肉に最徹底したものは支那である様に思はれる、支那の場合にあつては狗肉を買らんが爲に羊頭を掲げるのである、例へば或る實兵力を擁した大軍閥があるとする、現代支那にあつては實兵力即政權のある處であるのだから、其軍閥は實際は兵權と共に政權をも料理したいのであるが、さて世間をは、かつて露骨に手

を出せないことがある、それでなくても表面手を出すを不利とすることがある、此場合には狗肉を賣らんが爲に羊頭を掲げる方策をこる、即此場合我は軍人なり政治には干渉せず』と宣言する、然るに事實はこう云つた時が即政治に干渉した時のことで、其時の意志の動きは政權に干渉せんことを第一意志で、宣言は第一意志を達せんが爲めの羊頭となるのである、つまり干渉せずは干渉すと云つた方が早判りのする話になる、實例を擧げると吳佩孚將軍嘗て洛陽に武威赫赫たりし時「我は武辨のみ政治に干渉せず」と宣言した、然るに其時成立した内閣の樞要椅子は何ぞ知らん吳將軍の忠僕で占められてゐた、又嘗て吳佩孚と張作霖が年來犬猿の怨恨を一擲し討赤の旗を揚げて協力し、北京に懸踞してゐた馮玉祥を討つた時、馮軍遂に敗退して西部内蒙に追詰められ、北京は奉直聯軍の占有

に歸した、當時奉軍は約七方を京津の間に線込てゐた、之に反し吳佩孚軍は二萬を出てなかつた、張作霖は内心北京の政權を支配せんとは山々の望みてあつたが、併し露骨にやるのは不利であつた、そこで『我は政治に干渉せず政治は吳將軍の裁量に一任す』と云つた、之れが羊頭でなくて何であつたらふ、此時の光景は恰度北京政局と云ふ一本の蒲鋒を前にして、さあ之を貴殿の裁量で切つて分けてくれ賜へ、庖丁は貴殿の手の裏に渡すと云つて張さん向鉢巻きで七方の軍と云ふ握拳を固め、兩眼を見張つて視線を吳さんの顔と庖丁の刀の向ふ處とに七分三分に向けた形相、そこで相手の吳さん右手に庖丁を持たされ左手に握つた拳は僅に二萬の軍、迂か庖丁を蒲鋒にあて、勝手な分前へを興へんとするに、張さんの握拳は膝の上でどりくどり振へる、之には吳さんたるもの恐れざらんとするも能はぬ

、そこで張さんの顔色を讀みつ、七方と二方の比例の處を負けて八分二分見當に切つて大きな方を張さんに興へる、こふなるに北京政府なるもの、大臣の椅子は八と二の割合で張派と吳派に分占されることに決まる、此場合張さんの最初の云ひ分が羊頭で、閣僚の椅子をこるに狗肉であることは茲に重ねて申すまでもない、但し斯の如きは張さんや吳さんにのみ限つたことではなく、段さん近くは曹さんでも大總統を狙う程の人物は皆之れならざるはない、尤も日本あたりでも政黨政治家三名のつく人々のなかには此術を心得へた方々が決して少くないのは事實であらふ、只茲に吾々の注意すべきことは、支那が斯の如く狗肉を賣らんが爲に羊頭を掲げ白なるものを黒と云ふ國柄であるのに、此支那で羊頭を掲げて羊肉を賣る外國の肉商人があつたら、必ず失敗するであらふ事である、

支那に長い經驗をもち堅實に而かも實際的な西洋の某國商人などは流石に心得たもので、羊頭を掲げて羊肉に狗肉を混じて賣る術を心得てゐた、而して之が亦商賣だけではなくて一國の外交政策なるものがそれである、少くも數年前までは確かにそれで成功を遂げて來た、之に反し揚羊頭賣羊肉商は近年まで何れも悲慘なる倒産の跡を生きたる史上に留めてゐるのである。

今一つは斯うした支那のことであるから、掲げられたる一切の羊頭の下には、狗肉ばかり賣るのもあれば狗肉交りもある、そして羊肉ばかりのことは甚少ない、尤之は現在の巷間の支那肉屋に就て云ふのではない、政治と外交とが道徳とが慈善とが面子とが云つたやふな美はしい看板の下、往々にして反對の實相を見出すことを閉却してはならないと云ふのである、

湖北の田舎あたりに豆によく似た小石がある、此小石

以夷制夷

は百姓が斤量て豆を買う時に豆の中に混入されるもので、買手は其混入量を勘定に入れて買ふのであるが幾割の斤目が小石によつて加へられてゐるかを的確に中てること云ふことは大々しい、そこに掛引の面白味があるのだと云ふ、そして其小石は公然と賣ることが許されてゐて賣買がすむと或る處で撰り出されて又それが賣品となつて其小石商人の店に歸る、こうしたことの許された大きな支那であるから、慈善寺の賽銭箱の下に五右衛門があるたり、國民の爲と云ふ革命旗の下に國民の伏敵が蠢動してゐたり、兩國親善と云ふ辭令の裏に排外と云ふ烙印があつたり、愛國愛民の旗が雨にぬれたら害國害民の字が出て來たりすることも、決して絶無でないことは心得置くべき事共である。

支那は古來自國のことを中國と中華と云つて、自國あるを知つて他國あるを知らず、世界中に國は中國のみ、他は國にあらずして東は東夷、西は西夷、南は南蠻、北は北狄だなき隨分他國を食つた調子で、獨り威張りの尊大振りを發揮したものである、試に今より七八十年前の支那外交史を繙くといふ話だが、英國の使節なきが始めて北京に到つて大清國皇帝に謁見する時の場面の様子は遺憾なく使節を夷狄扱ひにしてゐる、之が爲め英國使節が憤慨して謁見を斷つたことなきもあつた。

斯ふした支那も西歐に蒸汽機關が發明されて以來、漸次黒船に見舞はれるやふになつてからと云ふものは、支那沿岸が通商と云ふ國際的經濟波濤によつて洗はれ

るやふになつた、併し支那は之を通商とは思はなかつた、夷狄の國からの朝貢だと解釋してゐた、處が此朝貢なるものが恐るべき外患を惹起して來た、之が爲には遂に英國との間に阿片戦争と云ふのが起り、氣位だけ高い老翁矛を執つて起つては見たものの悲哀を感じた外何ものもなく、其結果は遂に南京條約と云ふ近代支那外交史の悲慘なる一頁を書くよふなこゝになつてしまつた、それからと云ふものは各列國競ふて資本主義や帝國主義を此老大國支那に實施せんといふ試みた、こゝふなつて見るに支那は老衰を自覺し切齒脆腕して見た處で、最早全身の緩みは外來の憂患に對して幾何の抵抗力も出し得なかつた、可憐怨みを呑んで列強の蹂躪に任かす外なかつた、只此時此局面を打開すべく生み出された外交政策之即以夷制夷其のものであつた、抑以夷制夷とは夷を以つて夷を制すといふ、つまり甲

の借金取りが詰寄せて來ると、直ぐ乙の債主に手紙を出して甲が因業に壓迫するから乙に廻すべき筈の金子が皆無になること云つてやるのである、そふすること乙の借金取り火のやふになつて、さふはさゝねと云つた權勢で甲に突懸つて來る、そこで喧嘩は甲乙の間に移り、御本人高見の見物と云つた遺方である。

固より斯ふした週日は支那人の頭の裏に古來から存在してゐたものであるが、近代外交に入つてから一際目立つて其の効力が發揮された次第である、日本が日清戦争に勝つと李鴻章は露都に遊んだ、そふすることもなくサイベリア鉄道が計畫された、處が樂が利ますぎたことあつて帝露の東方侵略が露骨になつた、そして日露戦争が起つた、日本が勝つて日本の勢力が昇旭の勢を示した、そふなるに今度はアメリカやイギリスに秋波を送つて白人を引張り出して黄人たる隣人を制せん

した。見よベルサイユに華府に如何に第三國を牽いて日本を制したか、南滿に長江に如何に屢々英米を牽いて日本を壓迫せんとしたかを。

斯の如き以夷制夷と水項で話さんとする遠交近攻は實に近代支那外交のモットーであつた、今でもそふである、固より弱國となつて見れば此以外に列強の間に普處して、自己の獨立を維持して行く方法はないと思つてゐるのかもしれない、併し之は犬に考ぶべきことで、支那が常に機會的外交によつて、朝に甲を牽いて乙を制し、夕に乙を頼んで丙を壓する如き政策は、一時の糊塗策としては兎も角、遠水に支那の國をなす道ではあるまい。

支那の不信と支那の術策は之が爲めに世界の通り相場となり、遂に策を以つて策に斃ると云ふやぶな結果になるのであるまいか、支那が若し國家として生きん

ならば、毅然として其方策を確立すべきである、東亞に國をなす五千年、未だ嘗て國家として民族として滅びたことのない支那及び支那民族、今や此國家と民族は永遠に生きんが爲めの方途を確立すべき岐路に直面してゐる、而して支那の識者は最早其途を見出し、このことを僕は信ずるものである。

遠交近攻

遠きに交り近きを攻む之が即遠交近攻であつて、以夷制夷と共に支那外交秘策の兩輪である、國境を接した露國を制せんが爲めには一つ隔てた獨逸と交りを修む、一帯帶水の日本を抑へんが爲めには太平洋の彼岸に親善を申込むと云つた遺口で、以夷制夷は何れか云へば臨機的であり利害關係に即して用ひらるゝが、遠交近攻の方は稍常時的であり地理的であること云ふの差

がある。

遠交近攻は常に對外的に用いらるゝのみならず、實に多く國內的にも用いられてゐる、今此方面に於て述べるならば、革命軍興起までは、南方政府なるものは廣東省城と云つた位の價值しか認められてゐなかつた、夫れが爲め北方政府は先づいつて中央政府の形をもつてゐた、其實政令は北京城門を出てないで、地方政治は各地に割據する軍閥によつて握られてゐる狀況であつた、だからそこに自然隣接した軍閥同志の勢力争ひが起る、それが近年に於ける延べつ暮なしの戦争である。

乃て支那を統一ある一國と見た時其の戦争は内亂であるが、支那を大きく廣がつた地球の一部分と見た時は、恰も歐州各國が互に軍備と政治外交で相關くこと同じやぶに見へる、歐州ではお互に戦争は止めやぶと云ふ

ので國際聯盟を作つた、支那では差詰り北京政府が各地方軍閥の争鬪を調停する役目、恰も支那に於ける聯盟理事會の役目を務めたものである、現任では南方革命軍が勃興し北方の勢力が減縮せられて、往年の北京政府は今や地方軍閥の一となり下り、新となる南京政府が中央政府と云つた形となつて來た、併し之も亦往年の北京政府の轍を踏んで、今や南方派軍閥争鬪の聯盟理事會を力めてゐる、尤も草頭軍と云ふ名によつて、表面的に統一ある一貫軍番號が冠せられてはゐるが、名目と實際との別問題は支那では驚然のことで、第一軍から第四十五軍迄の内に事實結果し得る軍隊は云へば、一人の首將によつて概べられた數ヶ軍に過ぎない、一皮剥がせば犬猿も當ならぬ間絶にあるのが尠くない。

斯ふした關係であるから、相隣接した歐州各國が外交

見ても此意味の西北が常に東南を征服してゐる事が多い、さて此の兩者は一般に如何なる差異があるか云ふに、人心に於て東南は險難西北は忠實平たく云へば小利口と藪島鹿、地勢に於て一は平坦他は險峻、南船北馬で判る、氣候に於て溫和と嚴寒、飲食に於て裕と苦、米と麥粉、物價に於て精美と粗劣、絹布と木綿と言ふ様な差がある、だから自然體力に於て西北は東南よりも強健で困苦欠乏に耐へる、昔から支那を統一したと云はれる人々には西北の遊民階級云は、『ナラズモノ』が力によつて征服し、漸くにして東南人の文弱に同化されて滅んだ例が多いのであるから、今の支那人が西北の方が強いのだと思ひ込むのも無理はない、歴史の内に住むものには歴史に即した觀念が生ずるのは已むを得ぬ。

近來南北の戦争も随分續いて行はれてゐるが、今迄多

くの場台北方にやられてゐる、尤も過毅唐生習軍が奉天軍を河南に破つたのは例外のやふであるが、あれも關錫山の態度急變に牽制された奉軍の戰略的退却も大いに與つた敗因である、僕が今なぜこんな事を云ひ出したか云へば、支那將來の統一云ふことに、此の古來からの西北東南と云ふことが大いに關係あるからのである。

何時も云ふことではあるが支那では人爲によらない漢とした自然的觀念の指針なるものが、不思議な力を持つてゐる國である云ふことの見通し難いことである。

之と同じ様な話で今一つ中揚子江の上流から下流に向ふ軍隊は何時も勝を制すると言ふことで、之も歴史にはちやうんと現はれて居る、即長髮賊の時でも曾國藩の時でも或は蔣介石の場合でも、只最近の寧漢戦は

例外だが之には大いに別の理由がある、支那人に就て上流から下江する軍の強い所以を聞くに大抵は斯く答へる『湖南を制すれば武漢を擧すべく武漢を擧すれば金陵(南京)陥る』云、こんなことを譯も言はずに只漠然と信じてゐる、其の譯は尠らぬが下游の富裕な土地に駐する軍隊は日久而して心驕り氣佚す、之に反し上流の貧地にあるものは富地を前に見て驕れる敵を衝くが故に勝つてはなかるふか、何れにしても興味あることである。

同 文 同 種

同文同種云ふことは日支親善日云ふこと、共に現在では日支兩國人間實際の常套語となつてゐる、只前者は兩國人共に同文同種云ふが親善を云ふ時には日本人は日支親善云ふ支那人は中日親善云ふの

差はあるが何れも稍鼻に付く嫌のあるのは一樣である、借何時かも話したやふに支那と云ふ大きな社會が外見上老大國家であるにせられてゐる所以は、四億万人中絶對多數を占むる漢民族と云ふ歴史を同じふした同一民族が文字を同じふして居る爲に、言語人情風俗に差異あるに拘らず、古來の文獻も同一であり、文字文章によつて意志意見の發表をすれば讀方は違つても意味は同一である云ふことに大なる理由を見出すのである、茲に於てか同文同種は支那自体内に於て大なる効力を發揮しつゝあることは否定し難い事實である、然らば日支兩國間に於ける同文同種は果して如何、こゝにも無論効力の認むべきものはある、先づ第一に支那語を解せざる日本人が支那に旅行して何等かの手違から出迎へる筈の日本人が停車場に来てゐなかつた云ふ時、此時其日本人は英語で喋つても佛語でやつて

も支那人には解らない、支那語は難論できない、そこで其日本人は「ステッキ」の突て大地に日本公使館（領事館）なき書けば『我拉』ミ拉洋車のが飛せて走つてくれる、此時此日本人は同文國の有難さを知らる、又洋行をした時アメリカの大陸鐵道の車中なきで黄色い顔と黒い髪をもつ一人の紳士を隣席に見つけた時、日本人が支那人のさちらかき質を見て之れが日本人でなくて支那人であつたとしても、其お互は何もなく親味を感じて上海や横濱の話が出て意外に車窓の無聊を慰め得るころがあるであらふ、此時此両者は同種の懐かし味を覚ゆるであらふ、其他簡取引にしても支那人のよく云ふことではあるが、西洋人は何もなくギョツチなくて傲慢で言葉も六ヶ敷く習慣等が余りに懸離れた心持がするが、日本人になるころ何もなく近寄り易く融通もきき言葉で解らねば漢字で判かるこ

ゝ之は正に同文同種の効力であらふ、

併しながら今日の世界大勢に於て、東亞に國をなす同文同種の兩國民が今云つたやふな偶さかの機會に同文同種の實効力を感ずる位では實際心細い次第であると思ふ、さふしても兩國民は大處から遠觀して今少し眞劍な而して確乎たる自覺の上に同文同種兩國親善共存共榮を事實の上に具体化すべきである、

日本の基督とは外國の文書を上司が見る時に、英獨佛文は原文の儘にてよし、支那文は翻譯文を附するを要すなぞ云ふのがあるさふである、眞逆自分の歐米語に堪能なことを廣告するための氣まぐれは思はれないが、普通の日本人なら中學さへ出ていたら支那文はさふにか讀めさふな氣がするが如何なものか、又支那に使用して洋行したころもない支那官吏に矢鱈に英語でべら／＼喋り遂に相手の反感を買ふやふなことも珍しく

はない、つい近頃も此筆法で某章の參謀長を怒らした實例を耳にした、歐米語を話し得ることや洋行したころを一つの名譽とも又むらゝとも自ら考へてゐることに於ては、實に日本だけでなく支那にも其例はある、併し今や支那に於ては必要以外に歐米語でべちゃ／＼喋る男女は、支那に生れて支那を知らざる輕薄兒か或は社會主義や共產主義者でもあるやふに思われて眞面目に相手にされない傾向も決して少くない、一概に日本の病を以つて支那の病と見るは中らない。

日本の官場に於ても彼は英語に巧みなりとか獨佛語を話すに聞かされるころ第三者は多くの場合彼に敬意を拂ふ態度が見へる、然るに彼は支那語を心得て居ること云へば口では褒めるにしても心に輕き侮蔑を感ずるか露骨なものになればやあ支那ゴロですか位のことは云ひ兼ねない、電車や汽車の内でも横文字の本は熱心に讀む

ことを忘れぬが、四角な文字を讀むものは變りもの扱にされる、だから支那語の本にでも表紙に横文字を植ねば買れ行きがよくない、氣を付けて見るころ近頃の商品の「レツテル」でも殆ど横文字のは入らないものはない、雲尼壩辛の如き洋人の食べない醜話類でも「レツテル」は羅馬字である、但し羅馬字すら解し得ない一般日本の消費者の爲めに「うに」「しほから」丈けは平片名で印されてある。

凡そさふ云つたやふな妙な現象は急速に西洋文明を取入れた日本文明の余病とか副作用とも云ふのであらふが、それが爲めに肝心の營養分を攝取すべき食物を食べることを忘れてたり、忘れぬまでも食物を蔑視するなぞさふやふに既傾向が盛じて行くころしたら余病や副作用として棄て置けない一大問題ではあるまいか。

同文同種さか且支親善さか乃至は共存共榮が一種の口

頭禪であつたり外辭辭令であるなら最早何も云はない、只現世界の大局から見てそれが日支兩國の是非をも實現すべき道行きであるならば、口に同文同種と云ひながら事實に於て之を反對の行方をしてゐるやふては長崎に行かんとして上野驛から北上する汽車に乗つたやふなものであるかもしれない。

日支あべこべこと

日支兩國人は同文同種で、東洋思想の裏で東洋文化に生きつゝあるのであるが、それであつてあべこべことも随分少くない、極めて身近な例から始めると、毎日見る苦力や物賣りの肩の上の天秤棒のそり方が反對である、人力車の重心点が日本のは車軸の前にあり支那のは後方にある……これは乗る者の注意すべきことで、ごうかするに乘客が仰げに後方へ逆しまになり、車夫

が乾棒につかまつた儘空中にぶらさがつて、第三者が鷹攫して車夫を地上に引下げなかつたならば二人が空中で逆倒れて平均して危ぶない場面を演ずることがある、又たちの悪い車夫が乗客から掠奪追剥をやる時には、寂しい處で此手をつかつて急に乾棒を手離し客を後方へ逆しま倒にすることをよくやるのである……鋸の鉋の使用法が押すのミ引くのミ反對である、果物の皮のむぎ方が日本は庖丁を動かすが支那では庖丁が静止して果物がまわる、支那では總じて偶數は吉數であるが日本では奇數が吉數である、支那では事物の名前が形からつけられるが日本では内容に基いてつけられる、支那では聲のおきかしが逆行し日本では角袖式が多い、何れか云へば日本式は實彈で支那式は空砲が多い……然し此の空砲を實彈と認識する日本人は極めて少くない……支那の司法制度は嘗て列強の代表が樂

隊入りて搜し廻つた表面上の所謂法權とは別に實際上に於ては金持ちの罰が問はれ又大官に監禁や軟禁(監禁よりは少し手緩い)が行はる、に反し貧乏人は尻管位で放免される、日本のは之を反對に香舟の魚は遁れ窮民の罪が問はれる場合が多い。

道を歩くにしても支那では自動車の權が一番上で次が馬車其下が人力車最下が徒歩者と云ふ順序で概ね日本とは反對である、新ふした風に遺の五六丁も歩く内にでも見るもの聞くものにあべこべことが少くない、其他趣味に於ても食物に於ても此種の反對が少くない、日本の園花は櫻で支那のは牡丹と云ふ風にそこに淡泊と濃艶の差がある、庭園の作り方も支那は直線的で日本は曲線的である、食物のダシ汁をこらにしても鯉節と豚肉と云ふやふに清淡と油膩との差がある、人に就て見ても奇怪なことが少くない、かの近來流行の新

人なるものでも日本の新人と支那人のは反對の思想新傾向をもつてゐる、支那新人は南北を問はず國權回收論者である、換言すれば國權伸張論者で國家主義帝國主義論者とも云へる、然るに日本のそれは國權喪失論者であると云はれる、理由はないか、換言すれば敗北論者物質文明論者△△△△でないであらふか、見よ支那新選政治家外交家が過去のベルサイユワシントン兩會議に於て如何に華々しく國權回收論を吐いたか又近頃如何に熱烈に國權回收を叫びつゝあるか……たゞこれそれは自己立身の道具であるとしても其結果はよく列強を翻弄し幾分でも國權を回收してゐるのは事實である……支那のここを見てか一ら百までケナシ西洋となれば擧にでも傲ぶと云ふ日本新人達は大いに反省の要が果してないであらふか？